小さな水槽から作る豊かな海

話し手 タツノオトシゴハウス 館長
加藤（かとう） 紳（しん）さん（昭和46年11月11日生）
聞き手 希望が丘学園 鳳凰高等学校 普通科 1年

絶滅の危機

タツノオトシゴは漢方薬として乾燥させて、滋養強壮で使う地域もあります。だから、東南アジアを中心に数がどんどん減ってきているんです。他の地域でも、環境変化によって数が減少しているので、ワシントン条約で絶滅危惧種に指定されています。

私はタツノオトシゴを養殖し増やして、海にいるタツノオトシゴを獲る必要がなくなることを目指しています。他にも、海の環境改善やタツノオトシゴを通して、環境問題を発信する活動も行っています。

タツノオトシゴと鹿児島

番所鼻自然公園を養殖地に選んだ理由は、いくつかあって、まず黒潮という暖かい海がある。これはタツノオトシゴを養殖するにはふさわしい条件で、日本中いろんな海の調査もしたけど、ここは夏でも暑すぎない安定した温かい海水温でありがたいです。また、開けた海なので、水の循環がよくて、水質も綺麗ですね。そして、環状プールと開聞岳の景観も良いので選びました。

実は鹿児島県って、ひっくり返すとタツノオトシゴの形をしているんですよ。「あ、いいな」と、特別な縁も感じて、ここでやりたいなと思いました。

取り戻したい豊かな海

私は埼玉県出身なのですが、埼玉県って海がないんです。そのせいか、小さい頃から海に憧れていて、将来は海に関係する仕事に就きたいと思っていました。若い時に、漁師さんから、「昔の海は良かった」と聞いて、本来の豊かさを取り戻すため、自分にも何かできないかいろいろ模索していました。30歳の時に、ニュージーランドの海に潜っていたら、偶然タツノオトシゴと目が合ったんです。絶滅危惧種だという彼らにすっかり魅了されたその出会いが、今の活動の原点です。

タツノオトシゴは、背の高い海藻が無いと生きていけないんです。海藻で身を隠したり、そこに住んだり、海藻に集まってくる小さい生き物を食べたり。頴娃の漁師さんに聞くと、この辺も昔は背の高い海藻がたくさん生えていたようで、船に絡まるくらい。それを引き抜くと、タツノオトシゴが着いていたらしいんです。でも今は、頴娃の海には背の高い海藻やタツノオトシゴは少ないです。海底は砂漠みたいで、ウニばかりなんです。これは「磯焼け」という現象で、海のバランスが崩れて、海藻を食べるウニが増え、海藻を食べ尽くしてしまうのが原因です。そこで今、許可を取って水産高校と一緒に、ウニの除去に取り組んでいますが、一万匹くらい除去しても、何週間か経つと元に戻ってしまうので苦労しています。本当はウニが悪いわけではなくて、海のバランスを崩した人間に問題があるんですよね。

タツノオトシゴを町おこしに

現在はタツノオトシゴの養殖だけでなく、町おこしに結び付ける活動もしています。例えば、タツノオトシゴは、オスとメスがハートの形で産卵をするので「縁結び」ということで「番所の鐘」を設置したり、頴娃にたくさん人が来て欲しいと思い、養殖施設は無料で見学できるようにしています。近所の小学生にも気軽に来てもらって、それをきっかけに近くの海に興味を持って欲しいです。

それと、好きなことを仕事にするって、結構難しいじゃないですか。でも、そんな時に「タツノオトシゴでご飯食べてるおじさんがいたな」って思い出してほしいんです。“好きなことを続ければ仕事になるんだよ”って、皆さんに感じ取ってもらえたら嬉しいですね。

聞き書きコラム

タツノオトシゴの不思議な子育て

魚には見えないタツノオトシゴだが、ヨウジウオ科タツノオトシゴ属に分類される魚である。メスがオスのお腹にある育児嚢に卵を産み付け、オスはメスが産んだ卵を稚魚になるまで保護し、ふ化した稚魚を産出する。

鹿児島の海には、クロウミウマやタカクラタツなどが生息。近年では種子島沖で日本初記録のタマヨリタツが発見されるなど、複数のタツノオトシゴが暮らす重要な生息地である。

執筆：鳳凰高等学校 普通科 2年 稲田 愛子